



●収穫期を迎えた田んぼでは、見平さんが大型のコンバインで稲の刈り取り作業を行っています。栽培品種は「おぼろづき」「ほしのゆめ」のほかに、酒米の「吟風」などを手掛けています。



●イベントなどで消費者の「おいしい」という声を聞くことが、農業のやりがいにつながっています。



●刈り取った籾は自宅裏にある施設で乾燥、籾摺りを行ってから出荷。直売する分は、米の味わいを守るため、注文の度に精米をしています。

明日を語ろう! 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、たゆまぬ努力を続ける人々がいます。農業の未来を創造する「北の農業人」の情熱や取り組みをご紹介します。

●地域農業を未来へと引き継ぐ若い農業者 小さい頃から憧れていた 父親の背中を追いかけて農業の道へ。 規模の拡大と生産性の向上を図りながら この地域の農業を守っていききたい。

「栗山町」
國岡晃平さん



父親のようにになりたい 気づけば農業を志していた

栗山町の継立地区にある國岡さんの田んぼでは、黄金色に実った稲が収穫期を迎えていました。大型のコンバインを器用に操って、次々に稲を刈り取っていくのが、國岡晃平さん。父親である正好さんの跡を継ぐべく、8年前から家業の農業に携わっています。

晃平さんは、小学生の頃から「自分が父親の跡を継いで農業をやろう」と考えていたといいます。長男ということも理由の一つですが、何より大きく影響を与えたのが正好さんの働く姿でした。「父は、北海道の農業者として初めて無人ヘリコプターのオペレーター資格を取る

●地域農業を未来へと引き継ぐ若い農業者

小さい頃から憧れていた

父親の背中を追いかけて農業の道へ。

規模の拡大と生産性の向上を図りながら

この地域の農業を守っていききたい。

など、新しいことに挑戦してきました。その姿を見ていて、農業には希望がある、自分もやってみたい、と憧れのようなものを持つようになりました」

晃平さんは地元の高校を卒業後、北海道立農業大学校に進学。稲作経営専攻コースで2年間、稲作の技術と農業経営に必要な知識を学びました。「全道や全国から集まってきた仲間との出会いは、貴重な経験でした。他の地域の実践例などを知って、世界が広がりました。今でも当時の仲間との交流は続いています」

試行錯誤を繰り返すなかで 農業の難しさと魅力を知った

大学を卒業後、20歳で実家の農業を

「去年が良かったからといって、今年もうまくいくとは限らない。あらゆる手段を講じてはいるけれど、100%のものではない。それが農業の難しいところだし、新たな目標にもなっています」
そんな晃平さんが大切にしているのが「人とのつながり」です。農産物を購入してくれる人、農業をサポートしてくれる人、そして同じように農業を営む人たち。特に同年代の仲間とは互いにアドバイスをしたり、農作業を手伝ったりと、助け合うことも多く、ほかの生産現場を見て学ぶ機会にもなっているそうです。

新しい試みも取り入れながら 未来に続く農業をめざす

農業に携わるなかで、挑戦してみたいこともできました。それは水稲の直播栽培です。育苗や田植え作業をなくすることで、農作業にかかる負担を軽減できると注目されている技術で、北海道でも少しずつ普及が進んでいます。継立地区は土壌の性質から、直播に向かないとされてきましたが、基盤整備事業によって水はけが改善されることになり、直播栽培も可能になると期待されています。

晃平さんが新しい技術の導入をめざす背景には、営農規模の拡大と近隣の農



●國岡晃平さんは、地域の青年農業者の会「栗山町4日クラブ」の会長を務めています。周りの仲間に関わりながら、農業の情報をキャッチするようになっています。新しい技術やおもしろい取り組みがあれば、自分でも試してみたいと思いますね」



手伝い始めた晃平さんですが、当初はイメージと違うことばかり。とまどいの連続だった、と笑います。例えばトラクターの操作ひとつにしても、正好さんが作業をする様子を見てはいましたが、実際に自分でやってみてその難しさを思い知ったそうです。「父親の偉大さと、どれほど努力をしているのかということに気づかされた」と、当時は振り返ります。

6年前には無人ヘリコプターのオペレーター資格を取得。今では操作にも慣れ、正好さんと同様に、継立地区の共同防除などで活躍しています。栗山町の若手農業者の会では会長も務めるほど、地域農業の担い手として期待されている晃平さんですが、それでも「自分はまだまだ駆け出しの下っ端」といいます。

家の減少があります。國岡農場の主要作物の作付け面積は、水稲が20ヘクタール、秋まき小麦が8ヘクタール、大豆が6ヘクタールと、総面積で北海道の一農家当たりの平均を上回っています。これは従来から規模の拡大を図ってきたことに加え、離農する農家から引き継ぐ農地が増えているため。現在の家族経営というスタイルで農業を続けるには、作業の効率化を図り、負担を減らす必要があると晃平さんは考えています。

「親がそうしてくれたように、子どもたちにも農業は楽しい、と伝えることも自分の役割だと思っています」。親が農業を営んでいる同級生たちの多くが札幌に出てしまい、跡を継がない実状を見て、「自分がこの地域の農業を引き継がなければならぬ」という思いを強くしてきたという晃平さん。仲間の農業者と共に小学生を対象にした食育活動などを通して、農業の大切さや魅力を伝える取り組みも続けています。地域の農業を守り、未来につなげていくために、晃平さんは希望のある農業の在り方を求め続けています。



●晃平さんが「偉大な人」と評する父親の正好さんは、無人ヘリコプターの農業者オペレーターとして、北海道では草分け的な存在です。